

心理学的健康と時間軸にそった自己意識

—女子学生の親子の似より感をベースにして—

秋 山 幹 男

Psychological Health and Self oriented to Time axes

—An Analysis based on *Similarity* between Female Student and her Parents—

Mikio Akiyama

これまで、親子の似より感の群分け（大・中・小）は、七区分表示の区分③に入った項目数をもとに行っているという操作的な定義にとどめてきた（Fig. 1）。この区分③に取り込まれる項目数は、実にきれいなそれも連続した個数の帯をみせてくれる。その他の6つの区分に納まる個数は、そこまできれいには列ばない。今回は、もう一歩踏み込んで親子の似より感が意味することを述べることから始めてみたい。これは、この一年間の気づきでもあり再確認でもある。“親に似る”とは、父親と母親が似た性格をしており、さらに自分もそれを持っているという学生の認知（意識しているのかいないのかは込みで）を問うたものである。言い換えると、似より感大群に入る者の認知は、他の2群（中・小群）と比べて、三者に共通した性格項目（区分③に入る）をたくさんあげた人達なのである。これに対して、誕生後青年になるまでの生活の歩みの中でどちらかの親に似てきた（例えば、①母親と私が、②父親と私が）ということは、①では父親とはズレているという受け止め方であり、②では母親とはズレていると認知した学生なのである（純型）。また、両親同士は似ているとみるが自分はそうでない（純型）か、自分についてはどちらともいえない・分からない（準型）とみている者もある。これらの認知タイプは、主として似より感中・小群に組み込まれていくものなのだが、両親は似ているという性格認知については、似より感大群の中にも少数ではあるが存在し、その人達は区分③と区分⑥にたくさんの性格項目を入れている（複合型）。この他の純型としては、少数ではあるが、三者の性格がバラバラであるという認知をする学生もある（個性型）。

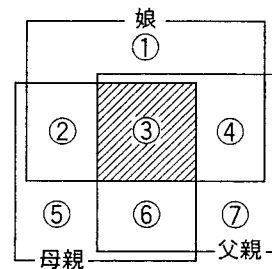


Fig.1 七区分表示図

筆者が命名した「親子の似より感（またはズレ感）」という一連の研究は、女子学生を対象にこれまで29年間追究し続けてきた。このうち似より感の群分けの作業に15年の歳月を要し、やっとこの群を使った応用研究が実り始めたのは、1992年以降のことである。それから11年、研究は2つのプロセス（心内化と継承化）の状態がどのような形で自己の中に取り込まれているかを追うことに主眼が置かれた。但し、今のところこのプロセスの納まり方は、研究の対象を青年期の女性におくか、それとも次世代を育てる壮年（成人）期の母親においたかの違いだけである。本来的には単に同じ側面を違った角度から観ていると言えるものなのかもしれない。この心内化に焦点をあてた研究は、青年の自己意識の中に親子の似より感がどのような形で取り込まれ、どのような影響を与えているものなのかを調べることにある。これまでに、MPIと

YG との関係性 (1992), 理想自己と現実自己のズレでみた「自己受容」の程度 (1992), 家族イメージとエゴグラムの出方 (1995), 自己形成と自己意識のあり方 (1995), 発達「課題/危機」の受け止め方 (2000) と時間軸と空間軸からみた自己の定位 (2001) 等確かめてきた。両親と自分が似ているとみる大群の人達は、これまでほぼ一貫して小群の者達と比べてその多くがプラス思考なのである。これに対し、片方の親とは似ているがもう一人の親とはズレているという人達を含む小群の者は、マイナス思考の人が $1/4$ 以上を占めることも分かってきた。似より感中群 (ここにも片方の親とはズレているとみる者が含まれる) では、大群の特徴を持つ者から小群の特徴をもつ者がこれもきれいに列んでいる。これまでは、大群と小群の差のみが特に目立ってきたが、その分全体の $1/2$ を占める中群が置き去りにされていたとも言える。これからの研究の新しい進展には、この中群の詳細なる検討も問われてくることだろう。

ここで少しこの研究の守備範囲 (限界) を紹介しておかねばなるまい。それは、用いている性格項目のことなのである。これは4つの因子で構成されており、その中での似より感3群の違い・特色ということである。F1 内向性 F2 自己顕示性 F3 誠実性 F4 明朗性がそれである。項目の内容を一つひとつみていくと、F1 はさらに小心性と行動性 (-) に、F3 は持続性と愛他性に分けることもできる。このように4因子で構成される42個の性格項目の中で取り扱われてきたのが、この3群の息の長い分析研究なのである。また、5件法で調査した結果をわざわざ3件法にして群を取り出すという手法が、効をそうしたとも言える。但し、「?」を付けられた項目は除外して数をカウントするので、小群の中にほとんどの者が含まれるこの?の回答の多い被調査者の存在は、やはり異質の存在者なのかもしれない。しかし、この人達をも大切に扱いながら今後の分析を続けていきたいと思うのである。

この度のまとめも、2001年の研究に引続き親子の似より感の心内化プロセスが、どのような形で女子青年の中に影響を与えているのかをみるためのものである。今回は、心理学的健康の面 (平石 1990/樋崎 1993) と昨年確かめた時間軸にそった自己意識の面 (遠藤 1981) から似より感3群の特徴を調べている。平石は、高校生より大学生年代までの青年期臨床事例研究から37事例の治療過程を検討の対象にしている。これらの青年が心理治療の中で自分自身を語る言葉、つまり自己意識に着目し、治療初期における否定的で病的な自己意識と、治療終結期における肯定的で健康な自己意識を取り出している。これは、心理学的健康をみる尺度の項目を作成するために抽出されたものである。3回の予備調査の後、健康—不健康と対他者—対自己という2つの両極性を軸として、これに従って4つの下位尺度を作成し、この関連の中で構造分析を行っている。分析の方法は、二段階の主成分分析を行い、自己意識の第一次主成分構造 (4尺度×各3主成分) と第二次主成分構造 (I 「自己確立感」 II 「自己拡散感」) を明らかにした。これは、臨床経験をもとに理論構築をした Erikson, E.H. の青年期の発達「課題/危機」である“自我同一性対自我同一性拡散”という対概念に近い結果となっている。平石のものは、探索的に得られた仮説的構成概念であるが、青年期における心理学的健康をみていく場合には大いに役に立つ物差しとなる。この平石の研究に目を向けたのが樋崎である。彼女は、平石の合計165項目を80項目に絞り込んでいる。本研究では樋崎の80項目を使用して、4尺度と第一次主成分構造 (4尺度×各3主成分) で心理学的健康を押さえていくことにする。

時間軸にそった自己意識の方は、遠藤らが作成した38項目を2001年に引続きここでも使うことにした。これは、Erikson, E.H. の I, II, IV と V 期の発達課題と危機の内容が青年期でどのように受け止められているかを問うものである。心理学的健康と時間軸にそった自己意識の関係性をみる場合には、前述した似より感中群に入る若者をも取り込んだ分析を展開させてみる。さらに、この心理学的健康のデータを用いながら、親子の似より感研究の信頼性をも確

かめてみたい。

もう一つの研究課題である、人生第③段階の老年期の自己のあり方についても、この一年間の考えを“自己を超える”というトランスパーソナルな世界との絡みの中で、ほんの少しではあるが前進させていく。

本研究の目的

人生第②段階の研究

- ① 親子の似より感3群と心理学的健康の関係性をみる。
- ② 心理学的健康と時間軸にそった自己意識との関わり方をみる。
- ③ 2002年に調べた新しいデータをもとに、心理学的健康から親子の似より感の信頼性を調べる。

人生第③段階の研究

- ④ 〈私〉と内なる他者との融合を限りなく続けることにより到達した《私》は、“自己を超える”という段階ではどのようなやり方でトランスパーソナルな世界と融合していくのだろうか。また、痴呆（惚ける）という現実も同じ方向にあるものなのだろうか。

方 法

調査Ⅰ 対象者 女子学生195名のうち、群分けに使用できたのは160名であった。

実施年月 1994年12月と1995年12月に青年心理学の授業中に実施した。①親子の似より感の調査(125名/81名)：1994.12.5./1995.12.4。②心理学的健康の調査(126名/69名)：1994.12.12./1995.12.11。③時間軸にそった自己意識調査(121名/69名)：1994.12.19./1995.12.18。

調査内容 [調査①] 4つの人格認知因子(F1内向性12項目、F2自己顕示性9項目、F3誠実性14項目、F4明朗性7項目)とその他よりなる48項目の性格調査を使用した。評定の対象は、「自分自身」「母親」と「父親」である。同じ48項目の調査用紙を対象ごとに頁をめくりながらチェックしてもらう。各項目は5段階で評定された(資料参照)。

[調査②] 平石(1990)の心理学的健康をみる165項目を80項目に縮小した樋崎(1993)の調査用紙を使用した。これは、健康—対自己(自己実現的態度、充実感、自己受容・信頼感)健康—対他者(自己表明・対人的積極性、異性・友人関係、他者受容)、不健康—対自己(目標喪失感・空虚感、不決断・自己不信感、衝動性・非現実感)と不健康—対他者(内閉性・人間不信、視線恐怖傾向・対人緊張、否定的家族感情)で構成されている(資料参照)。5件法。

[調査③] 遠藤ら(1981)が作成した38項目を使用した。発達段階Ⅰ期「基本的信頼感対不信感」：12項目、Ⅱ期「自律性対恥・疑惑」：6項目、Ⅳ期「生産性対劣等感」：11項目とⅤ期「自我同一性対拡散」：9項目で構成されている(5件法)。Ⅴ期については、現実の自分だけでなく、こうありたいと思う自分についても評定してもらった。ここでは、得点が高くなるほど発達課題を身につけていると認知していることになる。逆に、得点が低くなるほど発達は危機の状況にあると見なすのである。

データの処理 [1] 親子の似より感3群の抽出：その他の6項目を省いた42項目で群を分けている。まずは、5段階の評定を3段階に簡素化させる。非常にそう思うとそう思うを「はい」、そう思わないとまったくそう思わないを「いいえ」とした。どちらともいえない(?)

の項目は、外してカウントしない。「はい」と「いいえ」で回答された項目を七区分表示図の中に入れていき、区分③に納まった項目数の多少で3群に仕分けた。〔2〕 心理学的健康：4つの尺度と4尺度×各3主成分ごとに加算し、項目数で割った値を用いるので、得点の幅は1.00～5.00に納まる。

〔3〕 時間軸にそった自己意識も1.00～5.00の得点化がなされた。

調査Ⅱ 対象者 女子学生28名。人間科学部初等教育学科の3年生である。

調査年月 2002年4月に実施した。

調査内容 調査Ⅰと同じく、①親子の似より感調査、②心理学的健康を実施した。それぞれ5件法である。群の抽出、得点化の仕方は調査Ⅰと変わらない。

結果と考察

Ⅰ 親子の似より感3群と心理学的健康の関連性

Ⅰの1. 3群の抽出について

自分と両親について三者別々に回答されたデータは、一括して処理すると七区分のいずれかに納まる。このうちの区分③に入った項目数で、似より感3群は決定される。今回の結果は、28コ～0コの帯となった。3群は、大群：28～14コ（39名）、中群：13～6コ（78名）、小群：5～0コ（43名）に分けられた。

Ⅰの2. 心理学的健康について (1) HL分析

1994・1995年に実施したこの調査の協力者は195名だったのでこの人数で、4つの尺度について平均値とSDを算出した。これをもとに、各尺度について \bar{X} 以上の得点をだした者をHとし、未満の得点者をLとする。この4つのHとLを組み合わせると16の領域が出来上がるので、この中に160名を振り分けていった。Tab. 1は、16の領域に入れてみた3群の人数分布とその

Tab. 1 16の領域からみた3群の出現人数とその出現率

| 健康 | | 不健康 | | 人数 | | | | 出現% | | | |
|-----|-----|-----|-----|----|----|----|-----|------|------|------|------|
| 対自己 | 対他者 | 対自己 | 対他者 | 大 | 中 | 小 | 計 | 大 | 中 | 小 | 計 |
| H | H | H | H | 2 | 2 | 1 | 5 | 5.1 | 2.6 | 2.3 | 3.1 |
| | | | L | 2 | 4 | 1 | 7 | 5.1 | 5.1 | 2.3 | 4.4 |
| | | L | H | 2 | 4 | 1 | 7 | 5.1 | 5.1 | 2.3 | 4.4 |
| | | | L | 14 | 19 | 6 | 39 | 35.9 | 24.4 | 14.0 | 24.4 |
| | L | H | H | 2 | 5 | 2 | 9 | 5.1 | 6.4 | 4.7 | 5.6 |
| | | | L | 0 | 3 | 0 | 3 | 0.0 | 3.8 | 0.0 | 1.9 |
| | | L | H | 1 | 8 | 2 | 11 | 2.6 | 10.3 | 4.7 | 6.9 |
| | | | L | 4 | 3 | 1 | 8 | 10.3 | 3.8 | 2.3 | 5.0 |
| L | H | H | H | 2 | 1 | 3 | 6 | 5.1 | 1.3 | 7.0 | 3.8 |
| | | | L | 1 | 2 | 0 | 3 | 2.6 | 2.6 | 0.0 | 1.9 |
| | | L | H | 0 | 1 | 2 | 3 | 0.0 | 1.3 | 4.7 | 1.9 |
| | | | L | 1 | 2 | 0 | 3 | 2.6 | 2.6 | 0.0 | 1.9 |
| | L | H | H | 0 | 14 | 16 | 30 | 0.0 | 17.9 | 37.2 | 18.8 |
| | | | L | 1 | 3 | 2 | 6 | 2.6 | 3.8 | 4.7 | 3.8 |
| | | L | H | 2 | 4 | 2 | 8 | 5.1 | 5.1 | 4.7 | 5.0 |
| | | | L | 5 | 3 | 4 | 12 | 12.8 | 3.8 | 9.3 | 7.5 |
| | | | | 39 | 78 | 43 | 160 | | | | |

出現率である。16の領域に満遍なく分布するのではなく、一定の領域に固まり3群はその出現にはっきりとした違いをみせている。

似より感大群では、HHLLの者が35.9%、ついでLLLLが12.8%、HLLLが10.3%の出現である。合わせるとこの3領域で59.0%を占めている。中群の人達は、HHLL 24.4%、LLHH 17.9%、HLLH 10.3%の3領域で計52.6%である。小群では、LLHHが37.2%、HHLL 14.0%、LLLLで9.3%となり3領域で60.5%となっていた。この読み取りは、大群を構成する者の1/3強が自分を健康であるとみているのに対して、逆に小群の人達の1/3強が自分を不健康とみているということである。この特徴は、大群がプラス的で小群がマイナス的という、これまでの諸結果をさらに補強するものとなっている。

自分は、健康であり（健康—對自己，対他者）不健康ではない（不健康—對自己，対他者）とみるHHLLの学生と、自分は健康ではなく不健康であるとみるLLHHの人達を対象にして、本研究の目的②の分析検討を後に試みるつもりである。

(2) 心理学的健康の4つの尺度について

Tab. 2は、得点をもちいた比較である。一要因分散分析の結果は、4つの尺度とも群間で有意差がでてきた。多重比較（テューキ法、 $P < 0.05$ ）では、健康—対他者で大群と中群の得点に有意差がでなかった以外は3群間ではっきりと差をみせている。健康を尋ねる1健康—對自己と2健康—対他者は、大群>中群>小群となり、3不健康—對自己と4不健康—対他者では、逆に大群<中群<小群というはっきりとした群間差がでている。健康を問う場合と、不健康について回答を求めた場合では、後者の方の平均得点が低い。これは項目が治療初期における自分を語る言葉で構成されているので、普通に大学に通い授業を受けている学生の自己の評価であることを考慮に入れると、小群でも込みでみる場合は治療終結期に関係する項目で成り立っている健康1・2ほど得点は上がらないということは理解できる。

Tab. 2 3群における4つの尺度の \bar{X} とSD

| 群 | | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---------|-----------|------------|------------|------------|------------|
| | | 健康 對自己 | 健康 対他者 | 不健康 對自己 | 不健康 対他者 |
| 大 | \bar{X} | 3.84 | 3.83 | 2.28 | 2.11 |
| | SD | 0.49 | 0.53 | 0.45 | 0.43 |
| 中 | \bar{X} | 3.61 | 3.68 | 2.65 | 2.44 |
| | SD | 0.49 | 0.45 | 0.47 | 0.49 |
| 小 | \bar{X} | 3.30 | 3.44 | 2.88 | 2.64 |
| | SD | 0.59 | 0.44 | 0.65 | 0.50 |
| (-)分散分析 | | $P < .001$ | $P < .001$ | $P < .001$ | $P < .001$ |
| 大 VS 中 | | * | — | * | * |
| 大 VS 小 | | * | * | * | * |
| 中 VS 小 | | * | * | * | * |

有意差がでてきた。多重比較（テューキ法、 $P < 0.05$ ）では、健康—対他者で大群と中群の得点に有意差がでなかった以外は3群間ではっきりと差をみせている。健康を尋ねる1健康—對自己と2健康—対他者は、大群>中群>小群となり、3不健康—對自己と4不健康—対他者では、逆に大群<中群<小群というはっきりとした群間差がでている。健康を問う場合と、不健康について回答を求めた場合では、後者の方の平均得点が低い。これは項目が治療初期における自分を語る言葉で構成されているので、普通に大学に通い授業を受けている学生の自己の評価で

あることを考慮に入れると、小群でも込みでみる場合は治療終結期に関係する項目で成り立っている健康1・2ほど得点は上がらないということは理解できる。

(3) 12の主成分について

一要因分散分析の結果は、12の主成分のすべてにおいて有意差が得られた（Tab. 3）。多重比較でみると、大群と小群の比較ではすべてにおいて差をみせていることが分かる。大群は自分が健康であり不健康ではないと認知している。逆に、大群に比べて小群は自分を健康ではなく不健康とみていることになる。大群と中群の比較においては、健康では充実感においてのみ差をみせ、不健康については否定的家族感情を除いた5つの主成分で有意な差がでた。この否定的家族感情については、小群が大・中群に比して有意に得点が高い（とは言っても \bar{X} は2.11と低く、SDは0.98と散らばりの幅が大きいのであるが）。不健康—自己对己の主成分「目標喪失感・空虚感」では、3群間に有意差がみられた。心理学的健康から捉えても、これほどきれいな差をみせる親子の似より感の違いは、自己の形成や人格形成にとって一体どのような意味を内包しているのだろうか。この手ごたえをこれからどのように纏め上げていくべきなのだろうか。

Tab. 3 12の主成分における3群の \bar{X} とSD

| 群 | 健康—対自己尺度 | | | 健康—対他者尺度 | | | 不健康—対自己尺度 | | | 不健康—対他者尺度 | | | |
|---------|-----------------|--------|------------------|---------------------|-----------------|----------|-------------------|-------------------|------------------|------------------|---------------------|-----------------|-------|
| | 自己実 現的態 度 | 充実感 | 自己受 容・信 頼感 | 自己表明 ・対人的 積極性 | 異性・ 友人関 係 | 他者 受容 | 目標喪 失感・ 空虚感 | 不決断 ・自己 不信感 | 衝動性 ・非現 実感 | 内閉性 ・人間 不信 | 視線恐怖 傾向・ 対人緊張 | 否定的 家族感 情 | |
| 大 | \bar{X} | 3.57 | 3.43 | 4.41 | 3.36 | 4.19 | 3.97 | 1.92 | 2.89 | 2.05 | 1.85 | 2.59 | 1.68 |
| | SD | 0.71 | 0.74 | 0.44 | 0.84 | 0.67 | 0.59 | 0.51 | 0.76 | 0.70 | 0.62 | 0.65 | 0.61 |
| 中 | \bar{X} | 3.37 | 3.09 | 4.22 | 3.16 | 4.14 | 3.75 | 2.25 | 3.27 | 2.47 | 2.17 | 3.03 | 1.77 |
| | SD | 0.58 | 0.75 | 0.45 | 0.65 | 0.53 | 0.63 | 0.60 | 0.71 | 0.79 | 0.60 | 0.68 | 0.72 |
| 小 | \bar{X} | 2.91 | 2.78 | 4.12 | 2.93 | 3.80 | 3.64 | 2.62 | 3.37 | 2.66 | 2.31 | 3.23 | 2.11 |
| | SD | 0.79 | 0.87 | 0.49 | 0.59 | 0.64 | 0.57 | 0.86 | 0.70 | 0.91 | 0.56 | 0.69 | 0.98 |
| 一要因分散分析 | | P<.001 | P<.01 | P<.05 | P<.05 | P<.01 | P<.05 | P<.001 | P<.01 | P<.01 | P<.01 | P<.001 | P<.05 |
| 大 VS 中 | | — | * | — | — | — | — | * | * | * | * | * | — |
| 大 VS 小 | | * | * | * | * | * | * | * | * | * | * | * | * |
| 中 VS 小 | | * | — | — | — | — | — | * | — | — | — | — | * |

II 心理学的健康と時間軸にそった自己意識との関わり方

IIの1 心理学的健康について (1) 心理学的健康をもとにした群の抽出について

Tab. 1をみると、HHLL（健康1・2であり、不健康3・4ではない）とLLHH（健康1・2ではなく、不健康3・4である）という2つの領域だけで人数は全体の43.2%を占めていることが分かった（P.148）。そこで、この2つの領域に入った似より感3群の人達を対象にして、2001年の論文でも取り上げ分析している、時間軸にそった自己意識との関わり方を、もう一度調べ直しておきたい。ここでは、中群を \bar{X} 以上と未満に分けて、中上と中下群にする。3種の調査に協力してくれた学生のデータが使われたので対象となった人数は少なくなる。まずは、この4つの群でHHLL領域とLLHH領域に入った人数を挙げてみる。

HHLL領域：大群10名、中上群8名、中下群8名、小群5名

LLHH領域：大群0名、中上群4名、中下群9名、小群15名

これまで外されがちであった中群をも取り込んだ分析をすることが可能になるので、ここではHHLLで3群、LLHHで2群をつくり、心理学的健康と時間軸にそった自己意識との関わり方を比較検討する。5つの群は、下記の通りである。

HHLL（大群）n=10 HHLL（大群+中上群）n=18 HHLL（中下群+小群）n=13

LLHH（中上群）n=4 LLHH（中下群+小群）n=24

なお、LLHH（中上群）は人数が4名と少ないので、 \bar{X} とSDは算出せず事例的に取り扱うことにしたい。

(2) 5つの群の健康1・2と不健康3・4の得点について

5群を構成する4つの尺度の \bar{X} とSDはTab. 4に示した通りである。似より感3群でみた場合（Tab. 2）と比べて、HHLLの3群は似より感大群より健康1・2の平均値を高得点化させ、不健康3・4の得点を下げている。LLHH（中下+小）群は似より感小群よりも健康1・2はさらに低く、不健康3・4では高得点化させていた。健康1・2と不健康3・4が、HHLLの場合にはその構成員が似より感大群の人であれ、中上・中下群さらには小群の所属であっても、自分をみる見方には差がでなかったという事実は重要である。一方LLHHについては、まず似より感大群にはここに入る者がいなかったことに意味がある。中上群には4名いたのだが、似より

さらに高得点となり、不健康 3・4 の主成分は低い平均得点となっている。他方、LLHH (中下+小) 群は、似より感小群に比べ健康 1・2 の主成分ではより低得点となり、不健康 3・4 の主成分の平均得点はさらに高めであった。似より感中群では区分③に入った性格項目の数は \bar{X} より多いのであるが、LLHH (中上) 群を構成している 4 名の 12 の主成分の得点の出方は、LLHH (中下+小) 群と同じかそれ以上の特徴を示している。HHLL の場合は、その構成員が似より感中下や小群であっても、似より感大群以上の高得点 (健康 1・2 の 6 つの主成分) / 低得点 (不健康 3・4 の 6 つの主成分) をみせし、LLHH という認知をした似より感中上群の 4 名は、似より感小群以上の低得点 / 高得点であった。自分を健康であり不健康ではない (HHLL) と認知している者は、似より感 3 群にまたがり存在する。一方、自分は健康でなく不健康である (LLHH) とみる者は、似より感大群には存在せず、似より感中上群でも数は少ない。この組合せは、似より感中下群と小群に多いのである。

II の 2 時間軸にそった自己意識との関わり方について

Erikson, E.H. の Life Cycle 理論にそって遠藤ら (1981) が作成した発達課題 / 危機の質問項目を使用した。I 期: 基本的信頼感対不信感, II 期: 自律性対恥・疑惑, IV 期: 生産性対劣等感と V 期: 自我同一性対拡散 (現実の自分と理想の自分) を青年期の時点で確かめるものである。III 期については項目数が少ないので今回も省いてある。この時間軸にそった自己意識と似より感 3 群との関係は、2001 年にまとめている。今回は、もう一度視点を変えて HHLL (3 群) と LLHH (2 群) との絡みで追究していく (Tab. 6)。

LLHH (中下+小) 群は、3 つの HHLL 群との間で I・II・IV・V 期のすべてにおいて有意な差をみせている。また、V 期 (理想の自分) においても HHLL (大) 群と差があった。この時間軸にそった自己意識でも、似より感大群と比べた場合 HHLL (大) 群はかなりの高得点をだしている。

Tab. 6 4 つの群の各発達「課題 / 危機」の平均と SD と LLHH (中上) 4 名の得点

| ①②③④ 発達の課題 / 危機 | I 基本的信頼感 対 不信感 | II 自律性 対 恥・疑惑 | IV 生産性 対 劣等感 | V 自我同一性 対 拡散 | |
|----------------------------------|-------------------------|------------------------|-----------------------|-----------------|--------------|
| | | | | 現実の自分 | 理想の自分 |
| ¹ HHLL (大) n=10 | 4.32 0.25 | 3.70 0.54 | 4.28 0.37 | 3.83 0.45 | 4.59 0.28 |
| ² HHLL (大+中上) n=18 | 4.09 0.38 | 3.66 0.45 | 4.06 0.43 | 3.56 0.58 | 4.36 0.43 |
| ³ HHLL (中下+小) n=13 | 3.90 0.37 | 3.14 0.38 | 3.65 0.34 | 3.57 0.51 | 4.45 0.33 |
| ⁴ LLHH (中下+小) n=24 | 3.14 0.44 | 2.55 0.38 | 3.03 0.43 | 2.51 0.49 | 3.99 0.55 |
| 一要因分散分析 | P<.001 | P<.001 | P<.001 | P<.001 | P<.002 |
| 1 VS 2 | — | — | — | — | — |
| 1 VS 3 | — | * | * | — | — |
| 1 VS 4 | * | * | * | * | * |
| 2 VS 3 | — | * | * | — | — |
| 2 VS 4 | * | * | * | * | — |
| 3 VS 4 | * | * | * | * | — |
| LLHH (中上) n=4 | 3.08 | 3.00 | 3.00 | 2.22 | 4.22 |
| 事例分析 | 2.33 | 2.50 | 3.00 | 2.11 | 3.44 |
| | 3.50 | 3.17 | 3.73 | 2.89 | 4.67 |
| | 1.83 | 2.50 | 2.45 | 1.44 | 4.89 |

テューキイ法 (P<.05)

○ +1SD 以上
— -1SD 以下

自分が健康であり不健康ではないという認知をする学生に絞った今回の結果は、自己を形成してきた過去も現在もひっくるめて、発達の課題をクリアーしてきていると受け止めているようで、もう一段高いプラス志向となった。一方、LLHH（中下+小）群の学生は、似より感小群よりもさらに低い平均得点をだした。自分を健康でない不健康であるという見方をする者は、HHLL3群と比べると発達の危機をまだ抱えて今に至っていると言えようか。さらに、目立つ結果がここでは得られている。それは、HHLL（大）群とHHLL（中下+小）群、HHLL（大+中上）群とHHLL（中下+小）群における差である。Ⅱ期：自律性対恥・疑惑とⅣ期：生産性対劣等感の受け止め方が違っていたのである。HHLL（中下+小）群の人達は、LLHH（中下+小）群よりも有意に高い得点ではあったが、他の2つのHHLL群と比べれば差をみせているのである。（大）と（大+中上）は、（中下+小）よりも自己形成においては過去に位置する2つの発達課題でより高い自己評価をしている。この結果は、十分注目に値するものであると言える。

LLHH（中上）群の4名については、Tab. 6の下に示した。Ⅴ期の自我同一性対拡散における自己認知の低さが特に目だっている。4名中3名が、-1SD以下の低得点であった。

Ⅲ 心理学的健康からみた親子の似より感の信頼性について

Ⅲの1 2群の抽出について

新しいデータではあるが、調査対象者が28名なのでここでは区分③の項目数を平均値(\bar{X})以上と未満に分け、似より感大群と小群とすることにした。これまでの抽出でいくならば、大群は大と中上で成り立っており、小群は中下と小を含んでいるのである。区分③の項目数は、25～0コの出現であった。似より感大群は25～11コ、似より感小群は10～0コの被調査者で構成されている。

Ⅲの2 評定対象（自分、母親、父親）に対する4つの因子の現れ方

Fig. 2は、4つの因子ごとにみた似より感2群の「自分自身」・「母親」・「父親」の性格認知を、

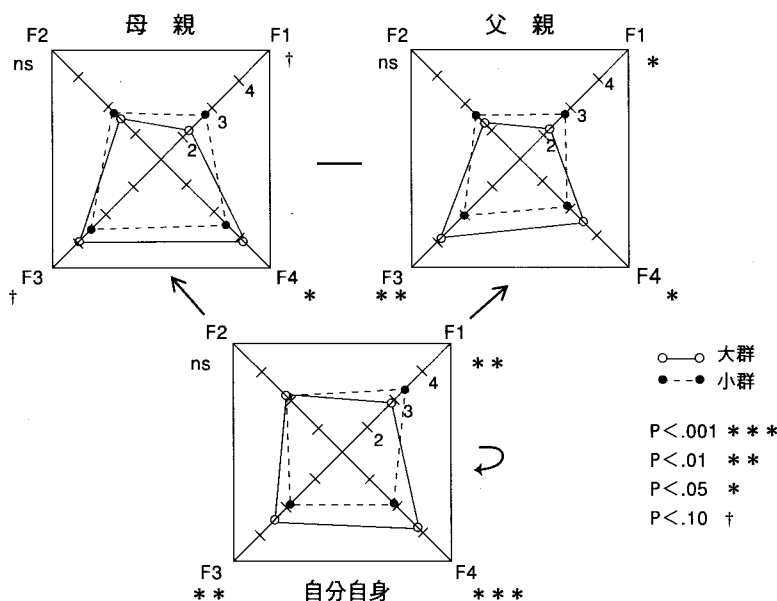


Fig. 2 3つの評定対象に対する2群(\bar{X})のスクウェア・グラフ

4つの因子ごとに図示したスクウェア・グラフである。これまでの群分けでは、中群の存在を設けているのだが、この度は人数の関係で大群と小群の比較となった。少し雑にはなるが、これまでみてきたように心理学的健康のデータを用いて、この親子の似より感研究が持っている信頼性を確かめてみたいと考えた。その前にまずは、三者の評定対象に対する2群の4つの因子別得点の出方をみていく。これまでの研究の蓄積から仮説も立てられるので、t検定は片側検定とした。

「自分自身」については、F1、F3とF4で群間に有意差が得られた。F1の内向性は、これまでの調査によれば、差が出る時と出ない時があった。今回ははっきりとした差をみせている。F3誠実性とF4明朗性は、これまで通りの結果である。大群は小群に比べて自分がより誠実であり明朗であると認知している。「母親」では、F4だけに差がでた ($P < 0.05$)。F1とF3は、傾向があるというレベルに留まった。「父親」については、自分と同様な結果をみせた。従来の研究から大きくズレているということはなく、似より感3群でみてきた成果をほぼ裏付けていると言える。

IIIの3 心理学的健康について (1) 4つの尺度

Fig. 3は、心理学的健康の4つの尺度の得点をスクウェア・グラフにして示したものである。Tab. 2と同様な結果が得られ、4つの尺度とも2群間で有意な差をみせている。大群は、自分が健康であり不健康ではないという認知である。小群は反対に、自分は大群と比べ、健康でなく不健康であるという受け止め方である。

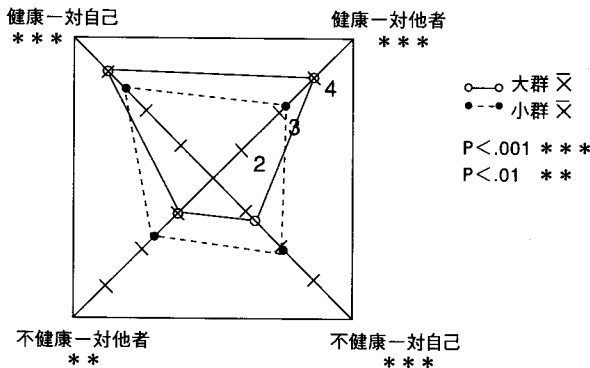


Fig. 3 心理学的健康のスクウェア・グラフ

親子の似より感と心理学的健康を調べたこの2002年のデータは、従来からの似より感の諸結果とほぼ同じベースで論じることができる。また、似より感2群の比較からみた心理学的健康については、前述したIの2 (Tab. 2)の結果をも裏付けるものとなった。よって、親子の似より感研究の信頼性を確かめることのできるデータが得られたと言ってもよからう。

(2) 2群の人数を16領域に振り分ける (HL分析)

健康一対自己、健康一対他者/不健康一対自己、不健康一対他者という4つの尺度を各々HとLに分け、それを組み合わせると16の領域になるのは、Tab. 1と同じ手法である。Tab. 7は、さらにはっきりとした大群と小群の違いを浮き彫りにしている。特に、似より感小群では、14名中10名(71.4%)がLLHHという認知をしている。これはものすごい結果と言えよう。似より感大群の方は7名(50.0%)がHHLL、2名がHLLHである。後の5名は、一人づつ分散している。160名を分析の対象にした場合の結果 (Tab. 1)より、さらに2群の特色がでてきた。似より感2群は心理学的健康からみた場合、その構成員が少ないにもかかわらず、従来の研究路線にそった積み上げを証明するものであり、似より感で分けて比較研究をすることの意義は十分に確かめられたと思う。

Tab. 7 16 領域からみた 2 群の出現人数と出現率

| 健康 | | 不健康 | | 人数 | | | 出現% | | |
|-----|-----|-----|-----|----|----|----|------|------|------|
| 対自己 | 対他者 | 対自己 | 対他者 | 大 | 小 | 計 | 大 | 小 | 計 |
| H | H | H | H | 0 | 1 | 1 | 0.0 | 7.1 | 3.6 |
| | | | L | 1 | 0 | 1 | 7.1 | 0.0 | 3.6 |
| | | L | H | 0 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | | | L | 7 | 0 | 7 | 50.0 | 0.0 | 25.0 |
| | L | H | H | 0 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | | | L | 0 | 1 | 1 | 0.0 | 7.1 | 3.6 |
| L | L | H | H | 2 | 0 | 2 | 14.3 | 0.0 | 7.1 |
| | | | L | 1 | 0 | 1 | 7.1 | 0.0 | 3.6 |
| | | L | H | 1 | 0 | 1 | 7.1 | 0.0 | 3.6 |
| | | | L | 1 | 1 | 2 | 7.1 | 7.1 | 7.1 |
| | H | H | H | 0 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | | | L | 0 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | L | H | H | 0 | 10 | 10 | 0.0 | 71.4 | 35.7 |
| | | | L | 1 | 1 | 2 | 7.1 | 7.1 | 7.1 |
| | | L | H | 0 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | | | L | 0 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | | | | 14 | 14 | 28 | | | |

(3) 12 の主成分について

I の 2 (3) : Tab. 3 と II の 1 (3) : Tab. 5 でみてきた 12 の主成分について、ここでもそのことを検討することができる。しかしここでは、表でみるまとめ方をせずに、六角形で図示してみた。2 群の比較は、同じく t 検定 (片側) を使用した。Fig. 4 は、健康尺度と不健康尺度に分け

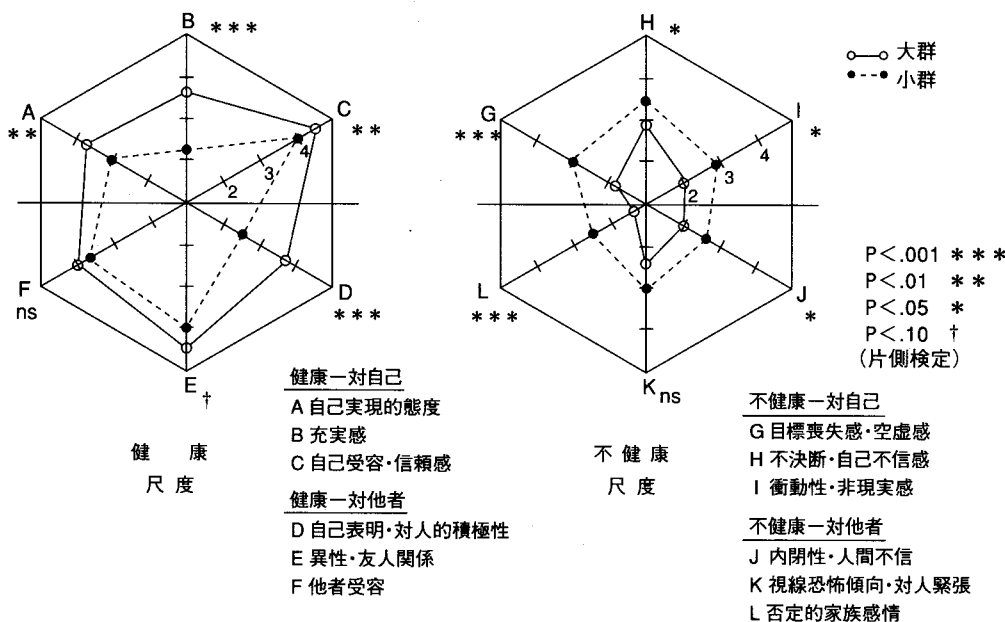


Fig. 4 12 の主成分における 2 群の \bar{X}

で平均得点がプロットされている。すべての主成分において2群間に差がでたとは言えなかったが、少ない人数にもかかわらずこれほどきれいに有意差のある結果がでたことは、十分評価に値するものであると思う。大群の学生がみせる健康性と小群が示した不健康性は、これまで続けてきた諸研究をしっかりと裏付けるものであると同時に、似より感研究の信頼性をさらに高めるものであったと言いたい。

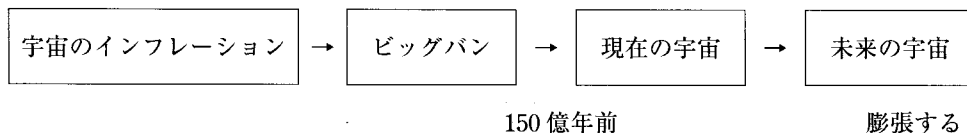
以上が、親子の似より感をベースにした心理学的健康と時間軸にそった自己意識の研究報告である。

ここからは大きく流れを変えて、秋山(2000, 2001)の理論モデルによる人生第③段階についての3年目の研究を載せておきたい(目的④)。この一年間の思考の蓄積を述べたいのであるが、トランスパーソナルな世界またはトランスパーソナル心理学の学びの深化が主になった年となり、それだけで時間が過ぎたような気もする(河合・吉福1986, 吉福1987, 1989, 菅1995, K. ウィルバー1996, 岡野2000)。しかしながら、考えてきたことはたとえ少しではあってもここでまとめておきたいと思う。

IV 「自己を超える」・「超えて含む」とはいかなる事なのだろうか

(I) ある放映について：宇宙の進化と一つのキーワード「真空のエネルギー」

2001年11月25日(日)にNHK教育で放映された、NHKスペシャル「宇宙未知への大紀行⑧：宇宙に終わりはあるのか」で、気になるキーワードが飛び出してきた。それは、「真空のエネルギー」というものであった。宇宙の進化とは、超特大級の科学のテーマであり、最もスケールの大きい知的探究の世界である。その神秘を探るための、または真理に迫るための理論構築がたった一つのワードを手にし、それを鍵とすることにより、宇宙はまだ膨張を続けているとみなされたという。空間が広がれば広がるほど「真空のエネルギー」は大きく空間を押し広げていくと考えることで、思考は飛躍的に発展したのである(インフレーション理論)。



この未来の宇宙は、大海の小島ようになっていく。空間だけがどんどん広がり、銀河は冷たくなりながら空間のみがひろがっていく。太陽の生命にも、逃れようのない終末が訪れる。

太陽のエネルギーは：

10億年後水素が少なくなるにつれて膨れ上がっていく。

20億年後地球の海は干上がっていく。大地は溶け、大部分は太陽に覆われる。

65億年後現在の100倍となり、水星は呑込まれる。

70億年後地球の大きさになり、黒い残骸となる。

中性子星かブラックホール化の宇宙は、ただ残骸のみがある寂しいものになる。そして、やがては消えていく(残骸の崩壊)。何だか寂しい限りであるが、もう少し続けよう。ブラックホールだけになり、それも長い時間をかけ、エネルギーを放出しながら、壊れ消滅。最後に残った

ブラックホールが消えると、宇宙は暗黒の世界。ただ冷たく膨張し続けていく。真空のエネルギーのみとなる。その後は……。永遠に続く予測不可能な……。

ところが、真空のエネルギーがもたらす新しい考え方は、そこでは止まらなかった。宇宙の誕生であるビッグバンは、なぜ起こったのだろうか。それ以前はどうなのか。ここでどうもインフレーション理論が登場するらしい。無数に宇宙が発生するのである。それは永遠に続くのであり、生と死を繰り返していく。「ワームホール」とは、時空の歪みによるトンネルである。二つの宇宙がワームホールでつながっている。つまりは、異空間への通路なのである。これを広げるのは、真空のエネルギーである (Fig. 5)。

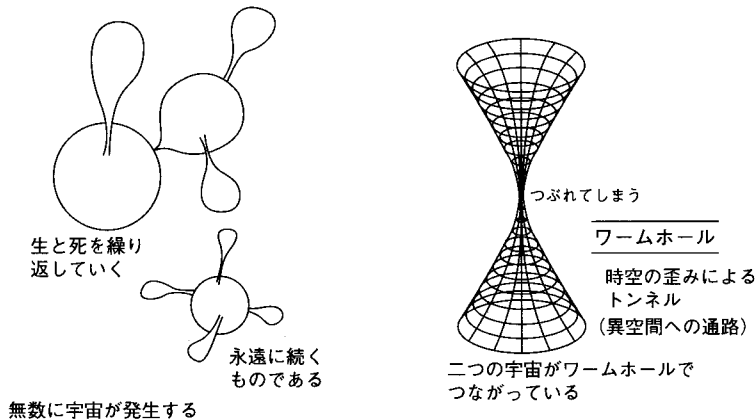


Fig. 5 真空のエネルギーがもたらした新しい考え方 (インフレーション理論)

なんともスケールの大きな考え方ではある。この宇宙の進化の詰め方が、筆者の理論構築にも影響を与えたようである。

(2) エリクソン, E. H. のライフ・サイクル理論をもとにして

平石 (1990) は考察で, Erikson の第V期について次のようにまとめている。「Erikson は自我同一性拡散の臨床像として, 親密さの問題や自意識の過剰, 時間的展望の拡散などを特徴として挙げている。親密さの問題では, 特に対人的融合 (interpersonal fusion) の不安から対人関係を避け, 孤立し内的な空虚感を感じるとしている。(p.327)」本研究の絡みの中で対人的融合の文字に目が止まった。彼の第V期とVI期の発達の危機を, 発達の課題に置き換えて書き直すと, この文章は, “対人的融合の喜びから対人関係を積極的に求め, かかわりのうちに充実感を感じ取ることができるようになる”と変換できる。親子の似より感研究とその上位の対概念である「似よることとズレること」は, 一人の人間が自分の人生の第②段階をどのように過ごしてきたかに大きくよりかかっている。その後の人生の第③段階は, Erikson の第Ⅶ・Ⅷ期と深くかかわっている。

西平 (1970) は, 第Ⅷ期「統合対絶望」の後に死への心の準備完成と付け加えている。1994年に他界するまえに Erikson が執筆した「老年期」, パーソナリティの完成が人間の終点ではないと考える脱・超の世界, または, トランスパーソナルな世界の存在を重ね合わせるならば, 第Ⅷ期のあとは, 死への心の準備のスタートとした方がいいようにも感じている。自己を超えるというトランスパーソナルの視座の中で, 「似よりとズレ」という対概念の深化・拡大をこ

の『超えて含む』とどう融合させていけばよいのだろうか。私に始まり、〈私〉を限りなく他者と関係づけながら融合化させ続け、いつの日にか《私》となり、それが自然（じねん）に融合化されていく。自己であり続けながら、ある時自己をも超越してしまうという受け止め方は、どんな世界を切り開いていくのだろうか。いや、超えて含まれるのだろうか。

(3) 氏原寛の「意識の場」と竹内敏晴の「表現への決意」の接点

氏原（1985, 1990, 1995, 2000）は、「意識の場」という捉え方をする臨床心理学者である。無意識は、意識があってこそその存在であると説く。つまり、図と地の関係性にそって考えているのである。人生の第②段階の最重要課題である自己の意識化、つまりは、似よりつつズレも始まるという誠に大切な開花に向けてのスタートである。この意識の場という認識は、無意識という世界が別にある、それに気づいていくというようなものではなく、意識をバックにしてこそ無意識がその存在をチラリと見せる、または、垣間見せるという仮説構成体次元の存在なのではあるまいか。

この考え方に竹内（2001）の考えを重ね合わせると、『生起閾値』とドッキングが可能になりそうである。表現への決意の章で、「人が成長するのは、一段一段階段を上がっていくようなわけにはいかない。ある瞬間、全力をふるって一つの淵を飛び越える、あるいはよじ登らなければならないであろう。（P.213）」「生きることを表現すること、あるいは認識することと言ってもいいし、行動することと言ってもいいが、そのようなすべてが一つになって人が成長する瞬間がそこにはあるのだ。（P.214）」たとえ目には見えない水面下（意識下）で一段一段と積み上がってきているとしても、表層の意識レベルではある瞬間に生起したとを感じる（認知する）のである。“変性意識状態で自己を超える体験をする”というトランスパーソナルの考え方もここでは取り込める。立花（1996）のまとめた「証言・臨死体験」では、臨死の体験をしてこの世に生還した人は、死を恐れなくなるし、人にやさしくなり、物にこせこせしなくなるという。これも変性意識状態の一つの体験であることは間違いない。何が、どのように、どういう条件の時に、どんなタイミングで……という自己を超える人間心理の一面を覗いたものなのかもしれない。

図と地という受け止め方は、全体と個のテーマに迫りうる大切な認知なのである。図は地の存在なくしては成立し得ないということは、人間の英知が掴み取ったものである。とすれば、「0」という空間あるいは存在は有り得ないこと・ものなのだろうか。生きている時の0（ゼロ）点の存在の意味、言い換えるならば、対概念をもとに生命の神秘に迫る、または、心を見ていく限りにおいては、絶対0ポイントを仮定しなくてもすむものなのだろうか。(1)の真空のエネルギーというキーワードが頭をよぎる。死とは異次元への入口なのであり、考えることを身につけた自己の消滅はありえないと考えることもできるのだろうか。禅の十牛図で示された第8図・第9図と大乘の教えらしい第10図は、自己というこれまでの心理学の追究を振り切る脱・超の世界をひもといたものと考えてもよいものなのだろうか。

(4) 「前個／個／超個」という進化論的視点について

菅（1995）は、〈前個／個／超個〉というトランスパーソナル的な進化論的視点をもつことの必要性を強調している。この〈前個／個／超個〉という意識進化の見取り図を完成させたのが、K. ウイルバーであると述べている。但し、これからは叩き台とするべきであり、彼の理論の詳細なる検討が求められていくとみている。トランスパーソナルは、「自律」と「つながり」のバランスをとろうとする動きである。霊的体験や神秘主義は、曇りのない「批判精神」を培う

ことに貢献するものであり、決して対立するものではない (P.199)。霊的なものは、退行的なベクトルと成長のベクトルの両方を合わせ持つものであるという。西洋の科学はいつもオカルトと背中合わせのものであったことを忘れてはならないが、それらを超えて含む進化論的視点を手にすることが今必要とされてきているのかもしれない。人生の第③段階は、己の世界と己からの脱・超世界を合わせ持つ段階である。ズレることをベースにしたこの個性化の段階は、ウイルバーの個のレベルと超個のレベルを含んでいる。他者が己に似ようとすることは許容しながらも、これまでの生活では自己体験してこなかったさらなる未知への挑戦であり、それゆえに危機でもある。《私》に到達した己は、大いなる似よりに向けてポスト③段階へ突き進んでいく。トランスパーソナルな世界へ進むと考える科学・文化財産／禅の十牛図が示す世界と、痴呆（惚ける）という体験の現実・事実のあり方などは、我々の心を一体どこに連れて行こうとしているのだろうか。

(5) 融合することと自己を超えて含むについて

K. ウイルバー (1996) のスケールの大きな理論的統合は、心理学にも多大なる前進を持たらしめていくことだろう。彼の能力は、これまで人類が築き上げてきた考え方をすべて取り込み、統合化させるというずば抜けた才能にあると思う。「脱同一化」(ロベルト・アサジオリ)、「ホロン革命」(アーサー・ケストラー)、「変性意識状態」(チャールズ・タート)などの先駆的業績をうまく使用することにより見事なまとめに仕上げている。これを一つのベースに据えることにより、いのちの進化についての仮説がより真実・真理に近づいていくことを期待したい。吉福 (1989) によると、ウイルバーの考える成長・発達のプロセスは、特定のアイデンティティや特定の能力が、超越され包括されて成長していく場合と、超越され放棄されて成長していく場合があるとみている (P.30)。また、彼がアサジオリの「脱同一化」をアイデンティティの移行をしめす概念として取り込んでいる (P.36) とも述べている。

筆者の考えている“融合する”とは、どのように認識されているものなのかを記してみたい。人生の第②段階で芽生え始めた《私》は、私に無いものを身につけている外なる他者と出会い、それを求めようとする時、彼との似よりの部分に自分を合わせつつ、その一方で気になるところを心で感じ取り、内なる他者化させていく。つまりは、ズレを受け入れ取り込みそして溶けあうのである。この関係性とプロセスが、絶えず働き合い螺旋的発達(守・破・離)を続けていくのが、人生の第②から人生の③段階なのである。この第③段階のどこかの時期に、この《私》の融合の発達が《私》となり、その《私》が自己を超える体験へと導いていく。この内なる融合の諸体験(マイクロコスモス)が、外なるさらに大きな宇宙(マクロコスモス)のもつ融合・包括の力の中に吸い込まれていく。宇宙という磁場に応じる力を《私》が持つことによって、ある瞬間に大変身を遂げるのである。この論の立て方は、宇宙がまだ膨張を続けていることを証明するために、真空のエネルギーの存在を考えついた宇宙物理学の研究者に見習った考え方なのだろうか。それとも横山 (1987) から得た禅の十牛図のさらなる発展なのだろうか。どこかでいつかドッキングさせていきたいものである。Fig. 6 は、(2) から (5) をまとめながら図示したものである。意外にもこの一年間一つの推理が自分の頭の中でできていたということに改めて驚いている次第である。

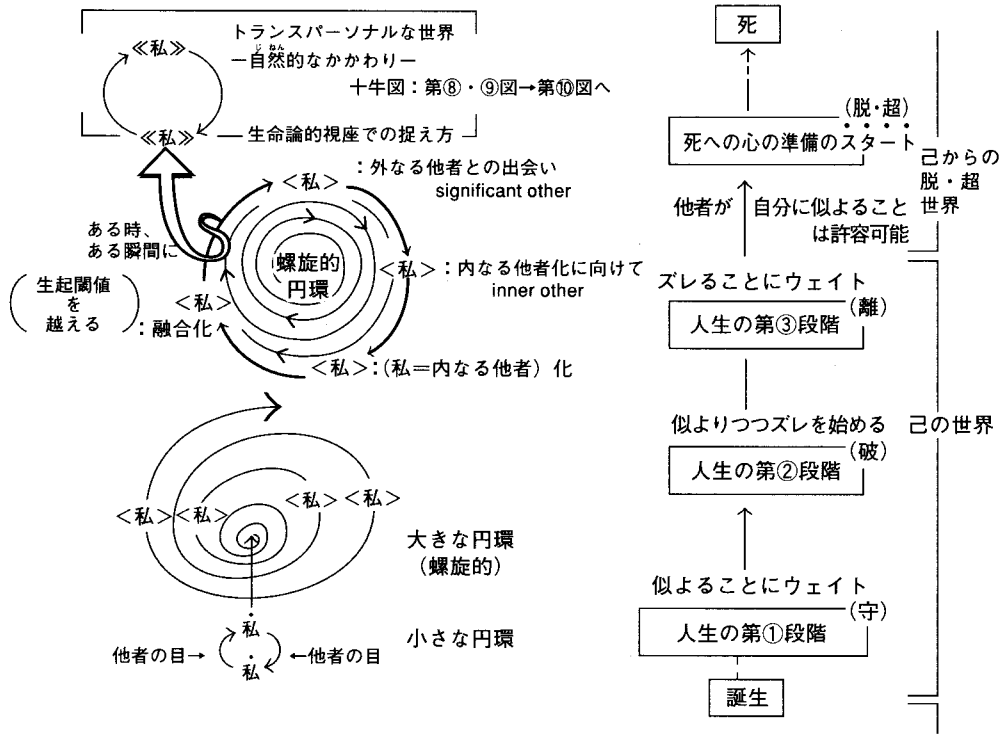


Fig. 6 <私>の融合と《私》の融合についての螺旋的円環による捉え方

文 献

- 秋山幹男 1968 回避学習におよぼす消去法の効果 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄録昭和42年度 70-74
- 秋山幹男 1992 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1993 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育 (広島文教女子大学教育学会) 7 29-48
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1995 親子の似よりと家族イメージ・エゴグラム 日本性格心理学会第4回大会発表論文集 100-101
- 秋山幹男 1995 親子の似よりと自己形成・自己意識 日本心理学会第59回大会発表論文集 31
- 秋山幹男 1997 親子の似より(感)の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 秋山幹男 1999 親子の似より感と心理的健康について 日本心理学会第63回大会論文集 52
- 秋山幹男 1999 女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知—似より感とズレ感をもとにした分析— 広島文教女子大学紀要 34 41-54
- 秋山幹男 2000 若い母親の養育態度と親子(幼児)の性格認知—実父母との似より感をベースにして 広島文教女子大学紀要 35 113-126
- 秋山幹男 2000 親子の似より感と発達「課題/危機」の受け止め方 日本心理学会第64回大会発表論文集 32
- 秋山幹男 2001 時間軸と空間軸からみた自己の定位—女子学生の親子の似より感をベースにして 広島文教女子大学紀要 36 63-82
- エリクソン, E. H. 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房 Erikson, E.H. 1982 The Life Cycle Completed W.W. Norton & Company, N.Y.
- エリクソン, E. H., エリクソン, J. M. & ギヴニック, H. Q. 1997 老年期 みすず書房

心理学的健康と時間軸にそった自己意識

- 遠藤辰雄編 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究 38 320-329
平松園枝 2001 自分らしく選ぶために なだいなだ編著 〈こころ〉の定点観測 岩波出版 41-59
河合隼雄・吉福伸逸共編 1986 宇宙意識への接近—伝統と科学の融和— 春秋社
西平直喜 1970 新しい存在と価値の発見 津留宏編 青年心理学 有斐閣 134-158
NHK 2001 NHKスペシャル「宇宙未知への大紀行⑧ 宇宙に終わりはあるのか」NHK教育 2001.11.25.
岡野守也 2000 トランスパーソナル心理学 青土社
菅 靖彦 1995 心はどこに向かうのか—トランスパーソナルの視点— 日本放送出版協会
立花 隆 1996 証言・臨死体験 文芸春秋
竹内敏晴 2001 思想する「からだ」 晶文社
樋崎紹子 1993 青年期における自己主張と自己意識について 広島文教女子大学大学院修士論文（未発表）
上田閑照・河合隼雄 1995 癒しと宗教 仏教 No31 2-36
氏原 寛 1985 カウンセリングの実践 誠信書房
氏原 寛 1990 心の一生 —ユング派に依るこころの原風景— ミネルヴァ書房
氏原 寛 1995 カウンセリングはなぜ効くのか—心理臨床の専門性と独自性— 創元社
氏原 寛 2000 カウンセリングの枠組み ミネルヴァ書房
ウイバー, K. 大野純一訳 1996 万物の歴史 春秋社 (A Brief History of Everything)
横山紘一 1987 十牛図の世界 講談社
吉福伸逸 1987 トランスパーソナルとは何か 春秋社
吉福伸逸 1989 トランスパーソナル・セラピー入門 平河出版社

資 料

資料1

親子の似より感調査の性格項目

- F1. 内向性 (12項目): しょげやすい 臆病な 感傷的な (オセンチな) 意志の弱い 甘えた ロマンチックな 行動力のある (-) 他人を気にする 指導力のある (-) スケールの大きな (-) 内気 服従的な
- F2. 自己顕示性 (9項目): 利己的・自己中心的な 支配欲の強い 強がり うぬぼれの強い わがままな ひねくれた 頑固な 虚栄心の強い 粗暴な
- F3. 誠実性 (14項目): 礼儀正しい ねばり強い 几帳面な ひたむきな ものを深く考える 包容力のある 正義感の強い 献身的な 親切な やさしい なげやりなところのある (-) 無責任な (-) あきっぱい (-) 調和のとれた
- F4. 明朗性 (7項目): 明るい ユーモアのある 友人の多い さっぱりした 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ 孤独な (-)
- その他 (6項目): しつと深い 不安定な 神経質な (線の細い) 疑い深い (不信の) (毎日の生活に) 生きがいを感じる 素直な

資料2

平石 (1990) の心理学的健康の項目: 短縮版 (樋崎式) 80項目

項目番号と項目内容 [ほぼ因子負荷量の高い順にピックアップした]

健康—対自己尺度 (23項目)

A 主成分名 自己実現的態度 (10項目)

- 29 自分に妥協せずに真剣にぶつかっていつている。
31 仕事や勉強に夢中になっている。
34 自分の夢を実現しようと意欲に燃えている。
36 張り合いがあり、やる気が出ている。
39 自分は前進していると感じる。
41 自分でなければできないことをやろうとしている。

44 自分のひいでたものを一生懸命伸ばそうとしている。

46 前向きの姿勢で取り組んでいる。

49 生きる価値、生きがいを発見している。

51 情熱をもって何かに取り組んでいる。

B 主成分名 充実感 (5項目)

2 わだかまりがなくスカッとした気分である。

8 生活がすごく楽しいと感じる。

14 自分のはのびのびと生きていると感じる。

19 精神的に楽な気分である。

24 充実感を感じる。

C 主成分名 自己受容・自己信頼感 (8項目)

55 自分に中にいろいろな否定的な感情があることを素直に認めている。

57 自分なりに個性を尊重したいと思う。

61 音楽や絵画に素直にこころが動かされる。

63 欠点の一つや二つあってもかまわないと思う。

67 自分の個性を素直に受け入れている。

72 やれば何かできるという自信がある。

76 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる。

80 私には私なりの人生があってもいいと思う。

健康—対他者尺度 (14項目)

D 主成分名 自己表明・対人的積極性 (5項目)

1 非難や反感を恐れない。

7 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。

13 人前でもこだわりなく自由に感じたままを表明できる。

18 人前でもありのままの自分を出せる。

23 疑問だと感じたらそれを堂々と表明できる。

E 主成分名 異性・友人関係 (5項目)

28 特定の異性に対して恋愛感情を抱くことができる。

33 気の許せる友達がいる。

38 異性に強い関心がある。

43 皆と一緒にいるだけで安心感を得られるときがある。

48 言葉を交わさずにただ一緒にいるだけでも無理を感じない人がある。

F 主成分名 他者受容 (4項目)

54 両親のことを一人の人間として客観的に見ることができる。

60 他人のことを良いところも悪いところもありのままに認められる。

66 自分とは違った意見を素直に受けとめることができる。

71 自分とは違った意見を持った人とも親しくできる。

不健康—対自己尺度 (18項目)

G 主成分名 目標喪失感・空虚感 (7項目)

4 何も熱中できるものがない。

6 満足感がもてない。

10 ところから楽しいと思える日がない。

12 自分には目標というものがない。

16 これからどう生きていったらよいか分からない。

21 無力感が強い。

26 自分には未来がないと感じる。

H 主成分名 不決断・自己不信感 (6項目)

32 いろいろなことを考えてしまって結局行動できない。

37 気になると同じことをいつまでも考えてしまう。

42 勇気がでない。

47 思ったことをすぐ行動にあらわせない。

52 何にでも迷ってしまう。

53 何をするのも人の意見を求めてしまう。

心理学的健康と時間軸にそった自己意識

I 主成分名 衝動性・非現実感 (5項目)

- 59 死にたいと思うことがある。
- 65 自分の身体が自分のものではないみたいに感じることもある。
- 69 うっ積した気持ちのためについ衝動的に行動してしまう。
- 74 現実の世界にいるのか夢の世界にいるのか分からないときがある。
- 78 いらいらすると自分を抑えられなくなり衝動的になってしまう。

不健康—対他者尺度 (25項目)

J 主成分名 内閉性・人間不信 (10項目)

- 3 私は人を信用していない。
- 5 人間関係をわずらわしいと感じる。
- 9 自分は他人の話に興味がない。
- 11 他人に対して好意的になれない。
- 15 他人と打ち解けて話せない。
- 17 他人との間に壁を作っている。
- 20 自分には親しくうちとけて話せる友人がいない。
- 22 私は友人とじっくりと話し合うという経験がない。
- 25 自分は他人に対してところを閉ざしているような気がする。
- 27 自分のことを分かってくれる友人がいない。

K 主成分名 視線恐怖傾向・対人緊張 (10項目)

- 56 人に向かって思ったことが言えずに言いなりになってしまうことがある。
- 58 人に対して自分のイメージを悪くしないかと恐れている。
- 62 無理して人に合わせようとして窮屈な思いをしている。
- 64 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。
- 68 他人には自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。
- 70 人前では何をすることも動作がぎこちなくなってしまう。
- 73 自分の気持ちをごまかして相手に合わせてしまう。
- 75 人から何か言われないうか、変な目でみられないかと気にしている。
- 77 自分は他人より劣っているか優れているかを気にしている。
- 79 不満があってもそれを相手にはっきりと言うことができない。

L 主成分名 否定的家族感情 (5項目)

- 30 家族は自分に対して理解を示してくれていないと思う。
- 35 親は自分を受け入れてくれていないと感じる。
- 40 家族とは肌が合わない感じがしている。
- 45 親に対して絶対に許せないと思っていることがある。
- 50 親を憎んでいる。

—平成 14 年 9 月 28 日 受理—